

大学生における黙読・音読・暗誦に対する態度の比較

FUKUDA, Yuki / 福田, 由紀

(出版者 / Publisher)

法政大学文学部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

Bulletin of the Faculty of Letters, Hosei University / 法政大学文学部紀要

(巻 / Volume)

49

(開始ページ / Start Page)

99

(終了ページ / End Page)

119

(発行年 / Year)

2004-03-02

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00002914>

大学生における 黙読・音読・暗誦に対する態度の比較

福田由紀

「読書」を文章を読むという行動という観点から考えた場合、目だけで文字を追う黙読、目だけではなく同時に発話を伴う音読、そして文字を見る事なしに記憶から検索をして文章を発話する暗誦という行動がある。特に小学校では学習指導要領の改訂により、黙読だけではなく、音読にも指導の力点に移り、国語の授業中に行われている。一方、暗誦に関しては、時間がかかる等の制約もあり、いくつかの実践が報告されている状況である。このように、実践の多い少ないはあるものの、国語という授業の中で、一連の流れとして読むという行動が暗黙のうちにとらえられている。すなわち、黙読をへて、音読、そして時間や教材が許せば暗誦をするという過程である。一般に、このような過程が素朴に考えられると思われる。

大学生の読書（黙読）に関して、秋田（1922）は読書量の要因と所属している集団（文系大学、看護系大学、専門学校）によって、読書に対する態度が異なっている事を示した。読書量が高い集団の方が、そうでない集団よりも読書に対して好意的な態度を持っている事が明らかになった。しかしながら、読書の有用性についてはどの群でも高く評価している事も示した。また、平山（印刷中）は今現在読書をするか否かを決める重要な要因の1つとして、読書習慣を挙げている。その習慣は、小学校から中学・高校に移行する際に、大きな分岐点があるとしている。つまり、ほとんどの人は小学校ではある程度、児童書を読んでいるが、中学校になると生活の変化や読むべき本の選択ができないといった理由で読まなくなる。そのような人たちが、大学生になった現在、本を読まない集団となっている。

音読については、最近、文章を声に出して読む事によって日本語の美しい響きを感じ、より深く理解をしようという本が多く刊行されている（斉藤，2001，2002）。また、川島（2002）は、老人性痴呆症にかかっている高齢者を対象に、音読することにより、前頭前野が刺激され、黙読よりも音読をした方が、脳はより多くの部位で活性化されることをfMRIを用い示した。そして、音読をすることは、教育的な観点から高度認知機能を行う準備状態が作ることであるといった主張を行っている（2003）。しかしながら、読み手の音読に対する態度に関する心理学的研究は少ない。

暗誦については、Dahlin & Watkins（2000）は、その経験の程度によって、どのように感じているかについて香港在住のドイツ系高校生と中国系高校生を対象に調べた。教育歴という観点において、西洋の教育では現在暗誦に重きを置いていない。一方、中国では暗誦教育が実践されている。そのために、Dahlin & Watkinsはこの2つの民族的グループを比較するために選定している。つまり、ドイツ系大学生は暗誦という活動に重きを置いていない教育を受け、一方、中国系の大学生は暗誦を体験し、かつ、その重要性について教育を受けている。その結果、暗誦経験が多い中国系大学生は、暗誦を肯定的にとらえ、かつ文章を深く理解するために必要な事であると回答した。一方、暗誦経験のほとんどないドイツ系大学生は、暗誦を単なる暗記にとらえ、理解する時の手助けにはならず、かつ、大変苦痛を伴う単純な作業としてとらえている事がわかった。

このように、読書（黙読）、音読、暗誦についての探索的研究はそれぞれ行われているが、黙読・音読・暗誦という本を読むという行動が、本を読むヒトにとって同じ連続線上の心理的な位置にあるか否かについての心理学的な研究はほとんどない。また、音読・暗誦にどのような態度をもっているかに焦点をあてた研究も少ない。そこで、本研究では、黙読だけではなく、3つの本読み行動に対して、読み手が同じような心的態度を持っているかについて明らかにする。その際、秋田（1992）は読書量を読んでいる本の冊数やその時間によって客観的に規定したが、私たちは自分たちが本を読んでいるかいないかについての主観的な自己判断も行っている。態度は心理的な概念であるため、客観的な読書量と同じように主観的な判断も関係していると考えられる。また、現在の読書量に影響を与えるとされる読書習慣についても考えていきたい。

そこで、次の仮説を検討する。仮説1-1は、「大学生の主観的・客観的読書量が高い人は低い人に比べ、読書に対して好意的な態度を持っている」である。仮説1-2は、「大学生の主観的・客観的読書量に関わりなく、読書の有用性は同じくらい高く感じている。」である。仮説1-3は、「大学生の主観的・客観的読書量が高い人は低い人に比べ、読書習慣を持っている」である。

仮説2-1は「文章の読み行動として連続線上に読書（黙読）、音読、暗誦があるのであれば、仮説1-1と同様に大学生の主観的・客観的読書量が高い人は低い人に比べ、音読に対して好意的な態度を持っている」である。仮説2-2は、「文章の読み行動として連続線上に読書（黙読）、音読、暗誦があるのであれば、仮説1-2と同様に大学生の主観的・客観的読書量に関わりなく、音読の有用性は同じくらい高く感じている。」である。仮説2-3は、「文章の読み行動として連続線上に読書（黙読）、音読、暗誦があるのであれば、仮説1-3と同様に大学生の主観的・客観的読書量が高い人は低い人に比べ、音読習慣を持っている」である。

仮説3-1は「文章の読み行動として連続線上に読書（黙読）、音読、暗誦があるのであれば、仮説1-1と同様に大学生の主観的・客観的読書量が高い人は低い人に比べ、暗誦に対して好意的な態度を持っている」である。仮説3-2は、「文章の読み行動として連続線上に読書（黙読）、音読、暗誦があるのであれば、仮説1-2と同様に大学生の主観的・客観的読書量に関わりなく、音読の有用性は同じくらい高く感じている。」である。仮説3-3は、「文章の読み行動として連続線上に読書（黙読）、音読、暗誦があるのであれば、仮説1-3と同様に大学生の主観的・客観的読書量が高い人は低い人に比べ、暗誦習慣を持っている」である。

<方法>

被験者 教育心理学を受講しているH大学生男性52名、女性38名の計90名。平均年齢は19歳6ヶ月で、範囲は18歳7ヶ月から31歳9ヶ月であった。回答に不備のあった6名は除外した。所属している学部は、文学部男性33名、女性24名の計57名、法学部男性9名、女性7名の計16名、経営学部男性7名、女性1名の計8名、国際文化学部男性2名、女性6名の計8名、キャリア・デザイン学部

男性1名であり、本調査の被験者は人文科学系大学生といえる。

手続き 調査用紙を授業中に一斉に配布し記入をしてもらった。その際、この調査は読書についてどんなことを考えているか、しているかを調べるためのものであり、どれだけたくさん読んでいるかという調査ではないことを教示した。また、読む人も読まない人もありのままに思ったこと、していることを答えてくれるように教示した。さらに、本調査での読書とは、雑誌・漫画は除く事も教示した。

調査内容は、本を読む事に対する自己評価と、その実態、読書・音読・暗誦についての一般的な態度、有用性、習慣について尋ねた。これらの質問項目は、平山（印刷中）、秋田（1992）の研究を参考に、本調査の目的にあわせて作成された。

具体的には、本を読む主観的な読書量については「あなたは、自分は本をよく読む方だと思いますか？」を①とてもそう思う②ややそう思う③どちらともいえない④あまり思わない⑤ぜんぜん思わないの5件法で尋ねた。

どのくらい読書を行っているかについて、「1ヶ月に何冊くらい本を読みますか？」を①0冊②1～2冊③3～5冊④6～10冊 ⑤11冊以上、「1日に大体どのくらい本を読みますか？」を①0分②30分程度③1時間程度④2時間程度⑤3時間程度⑥3時間以上によって尋ねた。

読書・音読・暗誦に関する一般的な態度については、「あなたは読書が好きですか？」「読書は、面白いですか？」「読書することは、楽ですか？」「読書するときは、うれしいですか？」「読書するときには、いやな気分になりますか？」「読書するとき、明るい気持ちになりますか？」を①ぜんぜん思わない②あまり思わない③どちらともいえない④ややそう思う⑤とてもそう思うの5件法で尋ね、この順に得点を与えた。また、音読・暗誦については上記読書の部分を、それぞれ音読・暗誦に変えてある。

有用性については「読書することは、良い事だと思いますか？」を①ぜんぜん思わない②あまり思わない③どちらともいえない④ややそう思う⑤とてもそう思うの5件法で尋ね、この順に得点を与えた。また、音読・暗誦については上記読書の部分を、それぞれ音読・暗誦に変えてある。

読書習慣については「あなたにとって読書は生活習慣の一部ですか？」を①

ぜんぜん思わない②あまり思わない③どちらともいえない④ややそう思う⑤とてもそう思うの5件法で尋ね、この順に得点を与えた。また、音読・暗誦については上記読書の部分を、それぞれ音読・暗誦に変えてある。

また、暗誦の実態について自由記述法によって尋ねたが、本論文ではその結果は取り扱わない。

<結果と考察>

主観的な読書量と客観的な読書量 「あなたは、自分は本をよく読む方だと思いますか?」, 「1ヶ月に何冊くらい本を読みますか?」, 「1日に大体どのくらい本を読みますか?」についての結果を表1に頻度を示した。

表1 主観的な読書量と客観的な読書量

あなたは、自分は本をよく読む方だと思いますか?	とても そう思う	やや そう思う	どちらでも ない	あまりそう 思わない	全然そう 思わない	
	6 6.7%	30 33.3%	17 18.9%	27 30.0%	10 11.1%	
1ヶ月に何冊くらい本を読みますか?	0冊	1~2冊	3~5冊	6冊~ 10冊	11冊以上	
	11 12.2%	49 54.4%	25 27.8%	4 4.4%	1 1.1%	
1日に大体どのくらい本を読みますか?	0分	30分 程度	1時間 程度	2時間 程度	3時間 程度	3時間 以上
	12 13.3%	32 35.6%	31 34.4%	10 11.1%	2 2.2%	3 3.3%

注：上段は頻度，下段は割合を示す。

「あなたは、自分は本をよく読む方だと思いますか?」という質問に関する主観的な読書量についての自己評価は、①ぜんぜん思わない②あまり思わないをあわせ、主観的な読書量低群、③どちらともいえないを中群、④ややそう思う⑤とてもそう思うをあわせ高群とした。主観的な読書量低群は37名(41.1%)、中群は17名(18.9%)、高群は36名(40.0%)であった。主観的な読書量高群は40.0%が多いが、これは被験者が所属する学部が人文系であることが影響し

ていると考えられる。

主観的な読書量とは別に、秋田（1992）にしたがい、客観的な読書量によって被験者を低・中・高群に分類した。具体的には「1ヶ月に何冊くらい本を読みますか？」①0冊②1～2冊③3～5冊④6～10冊 ⑤11冊以上と「1日に大体どのくらい本を読みますか？」①0分②30分程度③1時間程度④2時間程度⑤3時間程度⑥3時間以上の回答を加算し、4点以下の被験者を低群、5、6点の被験者を中群、7点以上の被験者を高群とした。その結果、低群は38名（42.2%）、中群は39名（43.3%）、高群は13名（14.4%）であった。

主観的な読書量と客観的な読書量のピアソンの相関係数は、.65であり、同じ内容について尋ねていることを考えると、あまり相関関係が高いとはいえない。大学生の読書量に対する主観的評価はやや不正確であり、本研究の目的のためには主観的読書量と客観的読書量の両方の側面から検討を行わなければならないであろう。

主観的な読書量と読書・音読・暗誦に対する態度の関係 読書量に対する自己評価によって、読書・暗誦・音読に対する態度に相違があるか否かを検討した。読書量の自己評価を要因（高群・中群・低群）とした被験者内計画の分散分析を行った。有意差が認められた場合には、LSD法により多重比較を行った。その結果を読書・音読・暗誦についてそれぞれ分けて考えていきたい。

(1) 読書（黙読）に対する態度

各群毎に、質問に対する平均値と標準偏差を表2に、分散分析の結果を表3に示した。これによると「読書することは、良い事だと思いますか？」という質問以外はすべて有意な差が認められた。「あなたは読書が好きですか？」「読書は、面白いですか？」「読書することは、楽ですか？」「読書するときは、うれしいですか？」「読書するときには、いやな気分になりますか？（逆転項目）」「読書するとき、明るい気持ちになりますか？」は、一般的な読書に対する感情を尋ねているので、読書量が自分で低いと考えている低群よりも、中群・高群の方が、より読書に対して好印象を持っているという結果は、仮説1-1の一部を支持した。

表2 主観的読書量別読書（黙読）に対する態度・有用性・習慣の平均値

	高群	中群	低群
あなたは読書が好きですか？	4.7 0.45	3.9 0.75	3.0 0.99
読書は、面白いですか？	4.7 0.54	4.1 0.83	3.5 1.04
読書することは、楽ですか？	3.9 0.97	3.4 0.79	2.8 1.09
読書するときは、うれしいですか？	4.2 0.75	3.5 0.87	3.0 1.19
読書するときには、いやな気分になりますか？	1.8 0.72	1.8 0.73	2.3 1.13
読書するとき、明るい気持ちになりますか？	3.5 0.88	3.3 0.77	2.8 0.90
読書することは、良い事だと思いますか？	4.8 0.42	4.5 0.62	4.8 0.48
あなたにとって読書は生活習慣の一部ですか？	4.1 0.96	2.8 0.64	1.9 0.88

注：上段は平均値，下段は標準偏差を示す。

表3 主観的読書量別読書（黙読）に対する態度・有用性・習慣の分散分析の結果

	F値	多重比較
あなたは読書が好きですか？	47.63**	高>中>低
読書は、面白いですか？	19.24**	高>中>低
読書することは、楽ですか？	12.50**	高>中≒低
読書するときは、うれしいですか？	13.10**	高≒中>低
読書するときには、いやな気分になりますか？	3.70*	高>低
読書するとき、明るい気持ちになりますか？	7.00**	高>中≒低
読書することは、良い事だと思いますか？	2.79n.s.	
あなたにとって読書は生活習慣の一部ですか？	53.56**	高>中>低

注：自由度はすべて2と87である。

また、「読書することは、良い事だと思いますか？」という質問では有意な差が認められなかった。この質問は、読書の有用性を直接尋ねている。また、評定平均値がどの群でも高かった。よって、仮説1-2の一部は支持された。この結果は、読書量が低いと自己評価している群でも、読書の有用性を高群や

中群と同じくらい感じている事を示している。このような有用性がわかっていながら、自分は本を読んでいないと感じている学生を、今後どのように本を読むように動機づけるかは今後の課題であろう。

一方、「あなたにとって読書は生活習慣の一部ですか?」という質問は、平山(印刷中)によると読書態度を決定する重要な要因となっている。その質問に対して、読書量の自己評価高群が中群・低群に、中群が低群よりも有意に習慣づけられていた。この点に関しても、仮説1-3の一部は支持された。この結果は大変興味深いといえよう。食事をする、睡眠をとるといった生活の一部と読書行動が同じに評価されていること示しているためである。

(2) 音読に対する態度

各群毎に、質問に対する平均値と標準偏差を表4に、分散分析の結果を表5に示した。「音読することは、面白いですか?」と「音読するときは、うれしいですか?」のみ、高群が低群よりも有意に面白い・嬉しいと感じている事が

表4 主観的読書量別音読に対する態度・有用性・習慣の平均値

	高群	中群	低群
あなたは音読が好きですか?	3.4 1.21	2.9 1.20	2.9 1.33
音読は、面白いですか?	3.4 1.13	2.9 1.22	2.8 1.23
音読することは、楽ですか?	3.4 1.18	2.9 1.22	3.2 1.16
音読するときは、うれしいですか?	2.9 1.17	2.7 0.85	2.3 1.02
音読するときには、いやな気分になりますか?	2.1 0.76	2.4 0.80	2.4 0.90
音読するとき、明るい気持ちになりますか?	3.1 1.22	2.8 0.81	2.5 1.07
音読することは、良い事だと思いますか?	4.1 0.87	4.1 0.79	3.9 0.94
あなたにとって音読は生活習慣の一部ですか?	2.2 1.06	1.7 0.77	1.7 0.97

注：上段は平均値，下段は標準偏差を示す。

表5 主観的読書量別音読に対する態度・有用性・習慣の分散分析の結果

	F値	多重比較
あなたは音読が好きですか？	1.71n.s.	
音読は、面白いですか？	3.07*	高>低
音読することは、楽ですか？	1.07n.s.	
音読するときは、うれしいですか？	3.47*	高>低
音読するときには、いやな気分になりますか？	1.31n.s.	
音読するとき、明るい気持ちになりますか？	2.75n.s.	
音読することは、良い事だと思いますか？	0.74n.s.	
あなたにとって音読は生活習慣の一部ですか？	2.45n.s.	

注：自由度はすべて2と87である。

わかった。仮説2-1は部分的に支持されたと言えよう。これは、次の暗誦に対する態度と読書に対する態度の中間的な状況を表していると考えられる。

また、「音読することは、良い事だと思いますか？」という有用性の質問についても、群間に有意な差は認められなかった。表5によると各平均値は、読書に対するものと同等ではないが、暗誦に対する態度よりもネガティブではない。しかし、音読の習慣はあまり無いといえる。よって、被験者にとって、音読することはやや有用性を感じる程度といえる。仮説2-2は部分的に支持されたといえる。

一方、「音読は生活習慣の一部ですか？」という質問に対する結果も、群間に有意な差は認められなかった。評定平均値の結果も低い。これらの結果は、読書をするあるいはあまりしないと思っていることにかかわらず、すべての被験者にとって、音読することをほとんどの人が行っていないと考えられる。仮説2-3は支持されなかった。

(3) 暗誦に対する態度

各群毎に、質問に対する平均値と標準偏差を表6に、分散分析の結果を表7に示した。これによると読書に対する態度とは全く異なり、暗誦に対する感情についても、暗誦の有用性についても、そして読書習慣についても有意差が認められなかった。読書量の自己評価が高ければ、それだけ読書行動と親しんでいると考えられる。同時に暗誦は読書行動の一部である。よって、暗誦に対す

表6 主観的読書量別暗誦に対する態度・有用性・習慣の平均値

	高群	中群	低群
あなたは暗誦が好きですか？	2.6 0.99	2.6 1.06	2.3 1.24
暗誦は、面白いですか？	2.5 1.08	2.6 1.17	2.2 1.19
暗誦することは、楽ですか？	2.3 1.05	2.1 0.93	2.2 1.21
暗誦するときは、うれしいですか？	2.3 0.91	2.3 0.85	1.9 1.08
暗誦するときには、いやな気分になりますか？	2.9 0.94	3.0 0.79	3.1 1.20
暗誦するとき、明るい気持ちになりますか？	2.3 0.90	2.2 0.83	1.9 0.92
暗誦することは、良い事だと思いますか？	3.3 1.05	3.4 0.87	3.5 0.80
あなたにとって暗誦は生活習慣の一部ですか？	1.5 0.61	1.8 0.75	1.5 0.80

注：上段は平均値，下段は標準偏差を示す。

表7 主観的読書量別暗誦に対する態度・有用性・習慣の分散分析の結果

	F値
あなたは暗誦が好きですか？	0.93n.s.
暗誦は、面白いですか？	0.93n.s.
暗誦することは、楽ですか？	0.10n.s.
暗誦するときは、うれしいですか？	1.84n.s.
暗誦するときには、いやな気分になりますか？	0.32n.s.
暗誦するとき、明るい気持ちになりますか？	1.85n.s.
暗誦することは、良い事だと思いますか？	0.47n.s.
あなたにとって暗誦は生活習慣の一部ですか？	1.01n.s.

注：自由度はすべて2と87である。

る態度は、読書に対する態度と同様に高群でより高くなると仮説3-1で予想された。しかし、仮説3-1は支持されなかった。これらの結果は、暗誦を読書行動の一部であるとした前提に誤謬があったと考えられる。被験者は暗誦と読書を同じ行動の延長線上に結びつけていないと考えられる。つまり、暗誦行

動と読書行動は全く別の心理的態度を生み出す、別の読書に関わる行動といえる。

また、「暗誦することは、良い事だと思いますか?」という有用性の質問についても、群間に有意な差は認められなかった。評定平均値も低く、「ややそう思っていること」を示している。これらの結果は、読書をするあるいはあまりしないと示していることにかかわらず、すべての被験者にとって、暗誦することは少しだけ有用性を感じていることを示している。仮説3-2は支持されなかった。

一方、「暗誦は生活習慣の一部ですか?」という質問に対する結果も、群間に有意な差は認められなかった。評定平均値の結果も非常に低い。これらの結果は、読書をするあるいはあまりしないと示していることにかかわらず、すべての被験者にとって、暗誦することをほとんどの人が行っていないと考えられる。仮説3-3は支持されなかった。

有用性の結果と習慣の結果をあわせて考えると、非常に興味深い。ほとんど暗誦する習慣が無いにもかかわらず、暗誦の有用性に関しては少しあると回答している。暗誦はなぜ有用であると思われるかについて、より詳しく調べる必要が今後の課題としてあるだろう。

客観的な読書量と読書・暗誦・音読に対する態度の関係 客観的な読書量によって、読書・暗誦・音読に対する態度に相違があるか否かを検討した。読書量を要因（高群・中群・低群）とした被験者内計画の分散分析を行った。有意差が認められた場合には、LSD法により多重比較を行った。その結果を読書・暗誦・音読についてそれぞれ分けて考えていきたい。

(1) 読書（黙読）に対する態度

各群毎に、質問に対する平均値と標準偏差を表8に、分散分析の結果を表9に示した。これによると「読書することは、良い事だと思いますか?」という質問以外はすべて有意な差が認められた。これらの結果は、主観的な読書量別の結果と同様であり、仮説1-1の一部を支持した。

また、「読書は生活習慣の一部ですか?」という質問に対する結果や、「読書

表8 客観的読書量別読書（黙読）に対する態度・有用性・習慣の平均値

	高群	中群	低群
あなたは読書が好きですか？	4.4 0.77	4.1 0.98	3.4 1.15
読書は、面白いですか？	4.5 0.78	4.2 0.87	3.7 1.06
読書することは、楽ですか？	4.2 0.99	3.4 0.94	2.9 1.16
読書するときは、うれしいですか？	4.5 0.78	3.6 0.99	3.2 1.15
読書するときには、いやな気分になりますか？	1.8 0.44	1.8 0.73	2.3 1.17
読書するとき、明るい気持ちになりますか？	3.8 0.88	3.2 0.77	2.9 0.90
読書することは、良い事だと思いますか？	4.8 0.38	4.7 0.52	4.7 0.52
あなたにとって読書は生活習慣の一部ですか？	3.8 1.52	3.4 1.00	2.2 1.09

注：上段は平均値，下段は標準偏差を示す。

表9 客観的読書量別読書（黙読）に対する態度・有用性・習慣の分散分析の結果

	F値	多重比較
あなたは読書が好きですか？	6.87**	高>中>低
読書は、面白いですか？	4.88**	高≐中>低
読書することは、楽ですか？	6.78**	高>中>低
読書するときは、うれしいですか？	6.88**	高>中≐低
読書するときには、いやな気分になりますか？	5.72**	高>中≐低
読書するとき、明るい気持ちになりますか？	7.00**	高>中≐低
読書することは、良い事だと思いますか？	0.48n.s.	
あなたにとって読書は生活習慣の一部ですか？	16.69**	高≐中>低

注：自由度はすべて2と87である。

することは、良い事だと思いますか？」の結果も、主観的な読書量別の結果と同様であった。これらの結果は、読書をするあるいはあまりしないことにかかわらず、すべての被験者にとって、読書することは有用性を感じるが、客観的な読書量が多い被験者ほど読書は生活習慣の一部になっていることを示す。こ

れの結果は、仮説1-2, 3のそれぞれ一部を支持している。

(2) 音読に対する態度

各群毎に、質問に対する平均値と標準偏差を表10に、分散分析の結果を表11に示した。これによると読書に対する態度とは全く異なり、音読に対する感情については有意差が認められなかった。これらの結果は、主観的な読書量別の結果とも差異があった。主観的な読書量別では、「面白さ」と「うれしさ」に有意な差が群間で認められた。これらの差異の理由は、主観的な読書量の判断と客観的な読書量との相違が現れていると考えられる。よって、心理的に読書をしていると思っている被験者は、音読することに面白さやうれしさを感じるが、実際に読書をしている被験者がそうでない被験者よりも面白さやうれしさを感じているわけではない。しかしながら、表10に示されているように、全般的に音読に対してポジティブな感情を持っているといえる。仮説2-1は

表10 客観的読書量別音読に対する態度・有用性・習慣の平均値

	高群	中群	低群
あなたは音読が好きですか？	3.4 1.45	3.3 1.15	2.9 1.32
音読は、面白いですか？	3.1 1.26	3.2 1.15	2.9 1.28
音読することは、楽ですか？	3.5 1.20	3.1 1.27	3.3 1.08
音読するときは、うれしいですか？	2.8 1.17	2.9 1.13	2.3 1.00
音読するときには、いやな気分になりますか？	2.5 0.88	2.1 0.81	2.5 0.80
音読するとき、明るい気持ちになりますか？	3.0 1.07	2.9 0.81	2.6 1.22
音読することは、良い事だと思いますか？	3.6 1.33	4.1 0.86	4.1 0.66
あなたにとって音読は生活習慣の一部ですか？	2.0 1.08	2.1 1.06	1.7 0.85

注：上段は平均値，下段は標準偏差を示す。

表11 客観的読書量別音読に対する態度・有用性・習慣の分散分析の結果

	F値
あなたは音読が好きですか？	1.05n.s.
音読は、面白いですか？	0.52n.s.
音読することは、楽ですか？	0.49n.s.
音読するときは、うれしいですか？	2.49n.s.
音読するときには、いやな気分になりますか？	2.87n.s.
音読するとき、明るい気持ちになりますか？	2.75n.s.
音読することは、良い事だと思いますか？	1.75n.s.
あなたにとって音読は生活習慣の一部ですか？	1.86n.s.

注：自由度はすべて2と87である。

部分的に支持されたといえる。

また、表10によると有用性についての平均値は、読書に対するものと同等ではないが、暗誦に対する態度よりもネガティブではない。しかし、音読の習慣はあまり無いといえる。これらの結果も主観的な読書量別の結果と同様であった。仮説2-2, 3は支持されなかった。

(3) 暗誦に対する態度

各群毎に、質問に対する平均値と標準偏差を表12に、分散分析の結果を表13に示した。これによると読書に対する態度とは全く異なり、暗誦に対する感情については有意差が認められなかった。また、表12によると、主観的な読書量別の結果と同様に暗誦に関するすべての質問項目で平均値は低く、ネガティブな感情を表している。これらの結果は、被験者は暗誦と読書を同じ行動の延長線上に結びつけていないことが客観的な指標でも明らかになった。仮説3-1は支持されなかった。

また、「暗誦は生活習慣の一部ですか？」という質問に対する結果は、非常に低い。一方「暗誦することは、良い事だと思いますか？」にのみ、ややそう思っていることを示している。これらの結果は、読書をするあるいはあまりしないことにかかわらず、すべての被験者にとって、暗誦することはやや有用性を感じるが、ネガティブな感情を引き起こし、ほとんどの人が行っていないと考えられる。仮説3-2, 3は支持されなかった。

表12 客観的読書量別暗誦に対する態度・有用性・習慣の平均値

	高群	中群	低群
あなたは暗誦が好きですか？	2.6 1.04	2.5 1.00	2.5 1.27
暗誦は、面白いですか？	2.5 1.13	2.5 1.10	2.3 1.21
暗誦することは、楽ですか？	2.0 1.08	2.2 1.05	2.3 1.16
暗誦するときは、うれしいですか？	2.2 0.98	2.1 0.81	2.1 1.11
暗誦するときには、いやな気分になりますか？	3.1 0.95	2.9 1.02	3.1 1.06
暗誦するとき、明るい気持ちになりますか？	2.2 1.07	2.1 0.83	2.1 0.94
暗誦することは、良い事だと思いますか？	3.0 0.80	3.3 0.87	3.5 1.05
あなたにとって暗誦は生活習慣の一部ですか？	1.4 0.65	1.6 0.67	1.5 0.80

注：上段は平均値，下段は標準偏差を示す。

表13 客観的読書量別暗誦に対する態度・有用性・習慣の分散分析の結果

	F値
あなたは暗誦が好きですか？	0.10n.s.
暗誦は、面白いですか？	0.22n.s.
暗誦することは、楽ですか？	0.28n.s.
暗誦するときは、うれしいですか？	0.03n.s.
暗誦するときには、いやな気分になりますか？	0.42n.s.
暗誦するとき、明るい気持ちになりますか？	0.00n.s.
暗誦することは、良い事だと思いますか？	1.72n.s.
あなたにとって暗誦は生活習慣の一部ですか？	0.51n.s.

注：自由度はすべて2と87である。

読書（黙読）・音読・暗誦に関する感情・習慣・有用性の関係

読書・音読・暗誦に関する感情・習慣・有用性の関係を検討するために、ピアソンの階級相関係数を算出した。

読書について表14, 音読について表15, 暗誦について表16にそれぞれの質問項目間の相関係数を示した。それらの値は概ね高かった。つまり, 読書・音読・暗誦について, 好意的な態度を持っている人は, それらの有用性を感じ,

表14 読書(黙読)についての相関係数

	面白い	楽である	うれしい	嫌な気分	明るい気持ち	良いこと	習慣である
好き	.838(**)	.602(**)	.713(**)	-.455(**)	.500(**)	.214(*)	.703(**)
面白い	1	.597(**)	.735(**)	-.569(**)	.545(**)	.260(*)	.620(**)
楽である		1	.591(**)	-.443(**)	.398(**)	.068	.583(**)
嬉しい			1	-.364(**)	.694(**)	.384(**)	.613(**)
嫌な気分				1	-.286(**)	-.065	-.305(**)
明るい気持ち					1	.242(*)	.469(**)
良いこと						1	.121

注: ** 相関係数は1%水準で有意(両側), * 相関係数は5%水準で有意(両側)を示す。

表15 音読に関する相関係数

	面白い	楽である	うれしい	嫌な気分	明るい気持ち	良いこと	習慣である
好き	.853(**)	.587(**)	.700(**)	-.502(**)	.646(**)	.464(**)	.578(**)
面白い	1	.515(**)	.759(**)	-.399(**)	.751(**)	.400(**)	.539(**)
楽である		1	.477(**)	-.485(**)	.452(**)	.323(**)	.330(**)
嬉しい			1	-.333(**)	.812(**)	.352(**)	.580(**)
嫌な気分				1	-.286(**)	-.149	-.245(*)
明るい気持ち					1	.445(**)	.538(**)
良いこと						1	.263(*)

注: ** 相関係数は1%水準で有意(両側), * 相関係数は5%水準で有意(両側)を示す。

表16 暗誦に関する相関係数

	面白い	楽である	うれしい	嫌な気分	明るい気持ち	良いこと	習慣である
好き	.882(**)	.589(**)	.611(**)	-.488(**)	.572(**)	.169	.322(**)
面白い	1	.430(**)	.631(**)	-.389(**)	.620(**)	.227(*)	.310(**)
楽である		1	.401(**)	-.536(**)	.431(**)	-.034	.239(*)
嬉しい			1	-.303(**)	.808(**)	.272(**)	.271(**)
嫌な気分				1	-.343(**)	-.028	-.145
明るい気持ち					1	.309(**)	.233(*)
良いこと						1	.129

注: ** 相関係数は1%水準で有意(両側), * 相関係数は5%水準で有意(両側)を示す。

生活習慣となっているといえる。また、同時にそれぞれの質問項目間で相関係数が高かったことは、各読み方において被験者は、まとまった態度を持っていることも示している。

次に、読書と音読についての質問項目の相関係数を表17に示した。読書と音読については、「読書は、面白いですか?」と「音読は、好きですか?」、「あなたにとって読書は生活習慣の一部ですか?」と「あなたにとって音読することは生活習慣の一部ですか?」、「音読するとき、明るい気持ちになりますか?」と「読書するとき、うれしいですか?」・「音読するとき、明るい気持ちになりますか?」のみ、.30を超える相関係数値を超え、やや相関関係があるといえる。

表17 読書と音読に関する相関係数

読書/音読	好き	面白い	楽である	うれしい	嫌な気分	明るい気持ち	良いこと	習慣である
好き	.241(*)	.243(*)	.129	.191	-.160	.230(*)	.203	.172
面白い	.335(**)	.278(**)	.144	.197	-.268(*)	.227(*)	.142	.225(*)
楽である	.268(*)	.241(*)	.174	.158	-.345(**)	.236(*)	.027	.167
うれしい	.228(*)	.172	.089	.239(*)	-.043	.315(**)	.173	.278(**)
嫌な気分	-.086	-.060	.079	.070	.240(*)	.056	.068	-.095
明るい気持ち	.249(*)	.221(*)	.154	.304(**)	-.064	.298(**)	.205	.216(*)
良いこと	.029	.012	.106	-.003	-.006	.105	.247(*)	.074
習慣である	.279(**)	.274(**)	-.008	.293(**)	-.145	.306(**)	.081	.314(**)

注: **相関係数は1%水準で有意(両側), *相関係数は5%水準で有意(両側)を示す。

読書と暗誦についての質問項目の相関係数を表18に示した。読書と暗誦に関しては、.30を超える相関係数値はなく、ほとんど相関関係はないといえる。

さらに、音読と暗誦についての質問項目の相関係数を表19に示した。「暗誦することは、面白いですか?」と「音読は、好きですか?」・「音読することは、面白いですか?」・「音読するとき、うれしいですか?」に、「暗誦することは、うれしいですか?」と「音読することは、うれしいですか?」・「音読するとき、明るい気持ちになりますか?」に、「暗誦するとき、明るい気持ちになりますか?」と「音読は、好きですか?」・「音読は面白いですか?」・「音読することはうれしいですか?」・「音読するとき、明るい気持ちになりますか?」

表18 読書と暗誦に関する相関係数

読書/暗誦	好き	面白い	楽である	うれしい	嫌な気分	明るい気持ち	良いこと	習慣である
好き	.178	.113	.023	.097	-.029	.133	-.071	.015
面白い	.138	.088	-.062	-.006	-.001	.093	-.010	-.043
楽である	.275(**)	.204	.170	.144	-.250(*)	.235(*)	-.007	.065
うれしい	.175	.179	-.038	.059	.104	.135	.069	.045
嫌な気分	-.016	.006	.085	.047	.175	.038	-.096	.008
明るい気持ち	.220(*)	.159	-.030	.106	.177	.177	.120	.057
良いこと	-.016	.056	-.358(**)	-.126	.271(**)	-.117	.096	-.106
習慣である	.086	.082	.062	.19	-.042	.256(*)	-.072	.038

注：** 相関係数は1%水準で有意（両側），* 相関係数は5%水準で有意（両側）を示す。

表19 音読と暗誦に関する相関係数

音読/暗誦	好き	面白い	楽である	うれしい	嫌な気分	明るい気持ち	良いこと	習慣である
好き	.228(*)	.305(**)	.256(*)	.204	-.036	.327(**)	-.083	.048
面白い	.249(*)	.351(**)	.211(*)	.276(**)	-.001	.340(**)	.019	-.080
楽である	.156	.212(*)	.142	.145	.054	.247(*)	-.022	-.051
うれしい	.261(*)	.383(**)	.230(*)	.424(**)	.024	.464(**)	-.037	.043
嫌な気分	-.106	-.168	-.103	-.039	.261(*)	-.131	.075	-.023
明るい気持ち	.211(*)	.293(**)	.204	.299(**)	.091	.356(**)	.049	-.036
良いこと	.116	.092	.078	.024	.037	.153	.130	.034
習慣である	.152	.242(*)	.197	.139	-.021	.206	-.030	.133

注：** 相関係数は1%水準で有意（両側），* 相関係数は5%水準で有意（両側）を示す。

に、やや相関関係が認められた。

このように、読書・暗誦・音読という本を読むことに関わる行動は、全般的に相関関係があるとは言えないだろう。むしろ、それぞれの行動内で心理的な態度はまとまっていると考えられる。これらの結果は、先の主観的・客観的読書量と読書・暗誦・音読に対する態度の関係の結果と一致する。また、相関関係の結果より、暗誦に対する態度は、読書（黙読）に対するそれよりも音読に対する態度に関係がやや深いといえるだろう。

<まとめ>

本調査の目的は、読書（黙読）・音読・暗誦という本を読むという行動が、

本を読むヒトにとって同じ連続線上の心理的な位置にあるか否かについての明らかにすることであった。その際、主観的な読書量と客観的な読書量を基準に、黙読・音読・暗誦という本を読むという行動に対する態度を測定した。

その結果、一連の仮説1—1, 2, 3である「大学生の主観的・客観的読書量が高い人は低い人に比べ、読書に対して好意的な態度とを持ち、読書習慣を持っているが、有用性については主観的・客観的読書量に関わりなく、同じくらい高く感じている。」ことが支持された。これらの結果は先行研究の結果と一致している。

しかしながら、「文章の読み行動として連続線上に読書（黙読）、音読、暗誦があるのであれば」、大学生の主観的・客観的読書量に対応して読書（黙読）と同じ態度、有用性の評価、習慣を音読・暗誦に対しても持つであろうと仮定した一連の仮説2, 3は、音読のみ一部支持されたに過ぎなかった。

また、読書（黙読）・音読・暗誦に対する態度や有用性、そして習慣に関する相関関係の結果をあわせて考慮すると、文章の読み行動として連続線上に読書（黙読）、音読、暗誦があるとは考えづらい。むしろ、3つの本を読む行動は、それぞれ独立し、心理的な態度を形成していると考えられる。それらの関係は、黙読と音読、そして音読と暗誦は心理的にはやや近く、黙読と暗誦は非常に離れていると考えられる。すなわち、模式化して考察すると、音読を真中にし、それに重なる形で両端に黙読と暗誦が存在するが、両端の2つには重なる部分がほとんどないといえる。このように、黙読、音読、暗誦の関係は、文章を読む人によって、異なった心理的作用を及ぼすと考えられる。

本研究では、3つの読み方に対する態度を主に扱ったが、それらの理解に対する影響などまだ明らかにされていないことも多い。特に、暗誦は黙読・音読の延長線上にあると考えられがちであるが、その実態について本研究では一部分を扱っただけである。暗誦される作品にはどのようなものがあるのか、暗誦はどれだけ記憶されるのか、暗誦に対してどのような利点・欠点を日本の暗誦者が認知しているかについて、今後の課題となるであろう。

<引用文献>

- 秋田 喜代美 1998 読書の発達心理学 国土社
- 秋田 喜代美 1992 大学生の読書に対する捉え方の検討 読書科学, 36.11-19.
- Dahlin, B. & Watkins, D. 2000 The role of repetition in the processes of memorizing and understanding: A comparison of the views of German and Chinese secondary school students in Hong Kong. *British Journal of Educational Psychology*, 70,65-84.
- 平山 祐一郎 印刷中 大学生の読書実態 -大学生の読書指導に向けて- 読書科学
- 石川 清治 1985 児童の読書についてする態度の発達の研究 読書科学, 29.89-97.
- 川島 隆太 2003 読み・書き・計算が子どもの脳を育てる 子どもの未来社
- 斉藤 孝 2001 声に出して読みたい日本語 草思社
- 斉藤 孝 2002 声に出して読みたい日本語2 草思社

A Comparison of attitudes and conceptions about reading silently, aloud and repetition

Yuki FUKUDA

This investigation compare between attitudes and conceptions about reading silently, reading aloud, and repetition.

Ninety university students responded to a questionnaire about their book-reading activities in the cases of reading silently, reading aloud, and repetition. The students who reported reading many books were assigned to an Upper group; those who reported reading some books were assigned to a Middle group; those who reported reading few books were assigned to a Lower group. Those categories were determined by both subjective and objective measures of reading. The subjective measure of reading was determined by responses to the question; "Do you read many books?" The objective measure of reading was the number of books read per month and the number of hours spent reading books per day.

The results of ANOVA revealed that the Upper group showed more positive attitude to reading silently, assigned greater utility to reading silently, and had more habits of reading silently than the Middle and the Lower groups. However all groups showed similar attitudes to reading aloud and repetition. Also, the results of correlation among the three reading activities were low. These results suggest that reading silently is different from reading aloud and repetition in psychological processes.